2009 年 8 月 8 日　現地演習

ウジュン・クロン国立公園訪問（8 月 8 日）

生息する動植物の生態、住民のエンパワーメントプログラムの内容など、国立公園を実際に歩きその実際を学ぶことが今回の国立公園訪問の目的である。国立公園本部（ラブアン）からの職員が同行下さった。

インドネシア全土には現在 40～50 の国立公園が存在する。1980 年に国立公園に指定されたウジュンクロン国立公園は、原生林、中核地域、バッファーゾーンにより構成されている。バッファーゾーンには 2 つの郡、19 村が含まれており、そのうち 14 村が国立公園と直接境界を接している。タマンジャヤ村もその１つである。ウジュンクロン国立公園では、自然保護と住民の生活保障を目的とした活動を行っており、具体的にはジャワサイやサルの保全、海洋保全、エコツーリズムなどのプログラムを実施している。説明によると、我々の滞在したタマンジャヤ村は戦略的な村だそうだ。その理由として、①海に面し、なおかつ農地も多く所持していることにより、漁業、農業による収入が得やすいこと、②他村と比べ小学校、中学校が整備され、高校へのアクセスも容易であるため、教育水準が高いこと、③ジャワサイの生息地であるため、観光業が盛んであること、があげられるとの説明であった。しかし、実際にはインフラ設備が整っているとは決していえず、観光業もそれほど盛んであるようには見えなかった。

国立公園では、観光化に向けた住民グループの組織化を目指す活動が行われている。現時点ではガイドの英語教育、ワークショップ、ランの栽培、手工芸品、たい肥作りなどの統合的農業プログラムが実施されている。基本的には住民中心のプロジェクトであることを前提としている。国立公園側は、グループをつくる際、他村民の参加を促すようアドバイスをしたり、商品の加工、包装、マーケティングに関与し、より発展的な活動内容になるよう援助している。これらのプロジェクトにはまだ課題が多く残されていることは、国立公園側も把握しており、現在までに成功しているプロジェクトはないとのことである。成功していない要因として、①地方政府の参加が不十分、②インフラの未整備、③国立公園当局からのプログラム資金が住民全体に行き届かず特定の人のみに利益がまわってしまうこと、などがあげられた。国立公園側は、資金の管理形態が細部まで行き届いており、各村の所持する天然資源、要望、コスト、需要の有無に適したプログラムを運行していると主張していた。しかし、後日事情に詳しい村人に聞くと、国立公園側の一方的な援助方法に疑問を抱いており、両者間の信頼関係の構築には課題が多いという印象をうけた。ウジュンクロン国立公園は、世界でも珍しい、人の手があまり入っていない公園らしい。今後、この自然を保ちつつ住民にとってプラスになる国立公園へと発展していくためには、住民と国立公園の相互理解が必要不可欠である。

（記録：平田生子）